

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

| | |
|--|---|
| 申請者 (ふりがな) | 國本彩永 (くにもと さえ) |
| 所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載) | 人間環境科学科 3年 |
| 発表年月 または事業開催年月 | 2026年 3月 |
| 発表学会・大会 または事業名・開催場所 | 日本発達心理学会第37回大会 |
| 発表者(※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること) | 國本彩永・木内愛奈・伊藤愛華・渡邊貴子・東美穂・大森幹真 |
| 発表題目(※学会発表の場合のみ記載) | フォントの視認性と読み方が可読性に与える影響 -読み方・フォント・フォニックス得点による視線パターン比較 |
| 発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。) | |
| <p><序論と目的></p> <p>文字の読みやすさは、読字速度や理解度に影響する要因の一つであり、その中でもフォントの違いは注視時間や視線移動などの読み過程に影響を及ぼすことが知られている (Rayner et al., 2001)。これまでの研究では、フォントの形状やサイズが可読性に及ぼす影響について、アイトラッキング装置を用いた検討が多く行われてきた (Franken et al., 2015)。しかし、文章の表記方法が同じであっても、英語のような音韻読みとローマ字のときのモーラ読みで、フォントが可読性に与える影響に違いがあるかは十分に検討されていない。そこで本研究では、英語とローマ字の文章を2種類のフォントで提示し、高校生を対象にフォニックス得点の高低や読み方 (英語読み、ローマ字読み)、フォントの違いにより音読時の視線パターンに違いが見られるかを検討することを目的とした。</p> <p><方法></p> <p><u>参加者</u>：高校生 21 名が研究に参加した。本研究は早稲田大学倫理審査委員会の承認 (No.2024-607) を得て、参加者に研究内容の説明を文書・口頭で行い、書面同意を得た上で研究を実施した。</p> <p><u>刺激と装置</u>：2 種類の読み方 (英語読み、ローマ字読み) と 2 種類のフォント (エレクトロハーモニクス、Century) を組み合わせ計 4 種の文章スライドを使用した (図 1 参照)。課題はモニターに映し出され、下部にはアイトラッカー (Tobii Pro fusion, Tobii technology Japan) を設置した。またフォニックス得点を測定するために TOPA-2+ の Letter Sound (LS) 課題を使用した。</p> <p><u>手続き</u>：まず LS 課題を実施し、評価点により LS 低群と LS 高群に分けた。視線機能計測において、参加者はアイトラッカーの画面から 60cm の位置に着席し、提示された文章を音読することを求めた。</p> <p><u>従属変数</u>：アイトラッカーによる測定興味領域内 (AOI) で観測された視線において、総注視時間、平均注視時間、視線停留回数を分析対象とし、三要因 (参加者×読み方×フォント) の分散分析を行った。</p> <p><結果と考察></p> <p>分散分析の結果、平均注視時間 [$F(1,19) = 6.79, p = .017, \eta^2 = .26$] や視線停留回数 [$F(1,19) = 11.03, p = .004, \eta^2 = .37$] においてフォント要因と読み方要因の間に有意な交互作用が見られ、Century フォントでの英語読みの際に平均注視時間が有意に短くなり、停留回数も少なくなることを</p> | |

示した。また、視線停留回数ではフォント要因と参加者要因間での有意な交互作用傾向も確認され、エレクトロハーモニクスフォントでは LS 高群の停留回数が多くなる傾向が見られた。LS 低群は単語全体の形状を視覚的に捉えて認識する傾向があるため、フォントの差異による影響を受けにくいと考えられる。一方で、LS 高群は文字と音韻の対応関係を個別に処理しながら読む傾向があるため、形状が複雑なフォントの場合、個々の文字の識別や音韻の照合に時間を要し、結果として読みの効率が低下する可能性がある。

※無断転載禁止